

## 最優秀作品賞

G i f t

河島 奈奈さん

「乳がんの疑いあり。要精密検査」

目の前が真っ暗になり、その場にくずおれそうになった。年に一度受けている人間ドックからの通知だった。嫌な予感があった。最近、右胸にしこりのような、妙に胸が張る感覚があったからだ。「きっと大丈夫だろう」そんな楽観は、見事に打ち砕かれた。実際に「乳がん」という文字を見ると、がんという病気が現実味を帯びてきて、私は恐怖した。「精密検査の予約をしなければ」と思いながらも、勇気が出ずに一週間くらい悶々と過ごした。「そう言えばさ、人間ドックの結果どうだったの？」のん気に聞いてくる夫をうらめしく思いながら、私は「大丈夫だったよ」と作り笑いを浮かべた。夫や娘に心配をかけるわけにはいかない。そう思った私は、実家の母に相談することにした。母はすぐに病院を探してくれ、私は精密検査を受けることになった。

検査当日。娘を夫に任せ、友達と会うと言って家を出た。病院では、まず先生による視触診。その後マンモグラフィーの検査があった。大変だったのは、胸を圧迫された時だった。こんなに痛いのか。「私って生きてるんだな」涙ぐみながら、そんなことを考えた。そしてエコーによる検査。これはマンモグラフィーに比べて楽だった。すべての検査は一時間ちょっとで終わり、私は結果を待合室で待っていた。名前を呼ばれ、診察室に入った。緊張して冷や汗が出ていた。こんなに緊張したのは久しぶりだ。そんな私に、先生は言った。「今回の検査では、異常は見つかりませんでした。心配いりません」にこやかに言う先生の表情を見て、私は全身の力が抜けるのを感じた。「胸が張りやすいようですね。これからも年に一度は検査を受けてください」先生の言葉に頷きながら、私は本当に良かったと安心していった。病院を出てから、私は実家に向かった。母に結果を伝え、病院を探してくれたお礼を伝えた。そして夕食の準備があるから、と早々に実家を出た。

家路をたどる車の中で考えていたのは、夕食のメニューだった。おなかを空かせた夫と娘のために、何をつくろうか。今日から私は、また普通の主婦に戻るのだ。そんな使命感を新たにした。家に着いて玄関を開けた時、ふわっといい匂いがした。私の好きなビーフシチューの匂いだ。「おかえりー」にこにこと娘が走ってきた。続けて夫も出てきた。「おかえり。疲れたろう？ご飯できてるよ」食卓には、すでに夕食の支度ができていた。驚いている私に、夫が事情を話してく

れた。私の母が、精密検査のことを夫に伝えていたのだ。そうだったのか。力が抜け、急におなかが空いてきた。いすに座り、まずは検査結果を伝えた。心配ない、ということがわかると、夫と娘は笑顔で顔を見合わせた。「今日は、明希奈ががんばって野菜を切ってくれたんだ」誇らしげな、それでいて期待に満ちた娘の目。少し不格好なトマトを口に入れる。「おいしい」思わず私はつぶやいた。こんなにおいしいトマトを食べたのは、初めてだった。ふいに涙がこぼれ、私は娘を抱き寄せた。夫が煮込んだビーフシチューも、私好みの味付けだった。私は泣きながら二人に「ありがとう」と言った。

当たり前のように食事ができること。家族がいること。私は自分の健康に感謝した。そして、これからもこの日常を大切にしていこうと誓った。人間ドックが、何気ない毎日を送れることの幸せを教えてくれた。これからも、毎年人間ドックを受けていこう。健康だけでなく、幸せな日々を送れている自分に気づくために。そして、家族に安心を届けるために。人間ドックは、自分だけではなく、家族にとっても最高の贈り物となった。